

『世間妾形氣』推読三題

教室で『世間妾形氣』（以下『妾形氣』と略）と『藤簍冊子』を並行して読み進めて一年半ほど経過した。『妾形氣』は巻三の途中まで、『藤簍冊子』は巻三から始めて巻四の半ばに漸く到達したばかりで、秋成独特の佶屈した文章に閉口しつつも、「研究」とは縁の遠い、読みに徹する気安さも手伝って楽しみな時間となっている。学生諸氏に語釈・出典調査と現代語訳を課し、その発表資料に自分の疑問を書き込みつつ読むうちに、純粹に本文解釈の段階で納得できない箇所がいくつか出来た。無論筆者の不明と無知は棚に上げ、本文の読解作業に即しての疑問を提示するしかないのであるが、自分としては、何気なく引用された箇所を引用した本人がどのように解釈しているのか理解し難い場合が多いのを見るにつけ、引用のあとに、全文解釈とはいわずまでもその大要を付して確認の資とするくらいの配慮はあつていいと思うし、立論は対象を徹底的に隅から隅まで解釈してからでも遅くはないと考えている。論者が当

然のように読みすぎし、疑問なく論拠として利用した本文の中に解釈できない部分があるならば、厳密に言えば論そのものが成り立たないこともあり得る。以下に述べるのは、精読半ばを過ぎたに留まる『妾形氣』の、高等な作品論・成立論・構想論とは無縁の、ささいな字句の問題にすぎないが、ともかくも全文現代語訳を学生と自分に強制して読んでいる筆者にはどうしても無視できない点であり、秋成研究の専門家の方々には是非ともお考えいただきたいと思っている。そして、ある作品のある部分をどう読むか、どういう意味として解釈するかを、もっと専門家に語っていただきたいと思う。「論」として高い次元を目指すのは研究者として当然であろう。しかし肝腎の本文の読みそのものが曖昧では、結局ところ不毛の論議となりはしないか。細部に亘る注釈の精度を上げるためにも、積極的に「読み」を提示していただきたい。そのきっかけにもなればと願うことである。

久保田 啓 一

なお、『妾形氣』については森山重雄氏の『上田秋成初期浮世草子評釈』（国書刊行会、昭和五十二年）がある（以下『評釈』と略）。注釈を進めるに従い異論を唱えるべき箇所を少なからず見出す、それは本稿のような形式で述べるべきではなからうし、またその任にもない。注釈段階での疑問は省き、本文そのものに対する違和感のごときものの表出に限ったことをお断りしておきたい。

一 卷一—三「おひなりやう」

卷一—三「織姫のぼつとり者は取て置の玉手箱」の終盤、お春をうとましく思い、小染を囲うに至った多門は、玉手箱に地黄煎玉をぬり付けてそしらぬ顔で寢室に戻る。

其夜もこして二夜三夜。むつましき相床も明の烏に起されて。是は昼じやと起たつ傍に。かはり果たるお春が倅に大きに驚き是はどうぞお春くとゆり起されて欠びまじり。何としてけはしいおひなりやうと。起あがる拍子に腰がつくり。あゝどうやら致しましたと。いふ声さへおかしく。一夜のまにそなたの姿かはりしはどういふ事ぞ。先、鏡をと取出してあてがへば。私が姿が何とせしとふたを取てさしむかへば。あら悲しや。きのふまで油きりたる女房の。たちまちに頭は夜半の霜を戴き。ひたいに老のなみ打よせて。腰に梓の

弓さへはるに力なく。百とせちかき姫の姿に。お春は夢かとばかり。（二十丁オ。四十七頁）¹

「むつましき相床」を二晩三晩と重ねて迎えた朝、「是は昼じや」と起床したのは、「起たつ傍に。かはり果たるお春が倅」を見出した多門、「是はどうぞお春くと揺り起こすのも多門、とすると、「ゆり起されて欠びまじり」に「何としてけはしいおひなりやう」と言いながら起床にかけて「腰がつくり」となるのは当然お春の方である。つまりお春は、多門に体を揺すられて起き上がるとする時まで自分の老いを自覚していなかった。「起あがる拍子に腰がつくり」となって初めて体の異常を悟る。「あゝどうやら致しました」がその不審を語り、続いて鏡を実見しての驚愕となる。このように読む文脈に誤りがあるうとは思えない。そこで問題としたいのが、多門に起こされて「欠びまじり」にお春がつぶやく「何としてけはしいおひなりやう」である。

当該箇所留意した先行研究は、管見の限りでは森山氏の『評釈』の注のみのようである。同書二一四頁の注六十四には、

けハしいおひなりやう はげしくふけたありさま。ひどい年のより方。

と記される。この語注は、『日本国語大辞典』や『新潮国語辞典』に、『源氏物語』浮舟の巻の「さかしがるめれど、

の劍幕に驚いての一言と考えられる。すなわち「おひなりやう」は「おいかりやう」の誤りではなかったか。

版面で見ると「おひなりやう」の「おひなり」を「おいかり」と読むのは絶対に不可能である。しかし先に版下執筆時の状況想定に言及したのは、原稿をもとに筆耕が版下を書いた段階です。この誤りは生じていたと推測すべきではないかと考えたためである。「い」と「ひ」、「か」「可」を字母とする」と「な」が紛れやすい字体であるのと言う迄もない。そしてもし原稿段階でこの箇所が特に紛れやすい状況にあったとしたら、版下を書く筆耕が「おいかり」を「おひなり」と読み違えたとしても不思議はない。写本では普通に試みられる誤写過程の推定を、原稿から版下へと進む工程に適用してみると、以上のような本文が想定されてくる。「おひなりやう」は「おいかりやう」の誤りと注するか、せめて(ママ)を付すべきではないかというのが筆者の意見である。「おひなり」のままではよいとされる方には、どう読み解くかを是非御教示いただきたい。

二 卷二―「妾と飯蛸はあれで果る」

卷二―「雛の酒所は山路のきも入嬢が附親」の冒頭近く、「表向の呼むかへ」でない結婚の弊を説く箇所に、

在所の甥きいに跡やつて下されと。脚布きよふのしめくゝりより。いつしか一家の中もむつまじからぬ品に成るは膳せんの箸はし。妾てかひと飯蛸いみだこはあれで果る物にして。女房は表向の呼むかへをこそねがはまほしきわざなれ。(二丁オ。五十五頁)との一節がある。その中の「妾と飯蛸はあれで果る」がわからない。「あれで」とは何のことなのか。

文脈からすると、妾は結局は妾にすぎず、その品性のいやささは所詮奥様になれるはずもないということをつけているのであろう。「評釈」では「妾は妾で、とうてい正妻にはならぬことを飯蛸にたとえていったものか」と注し、参考に『いまみや草』の句「飯蛸のあはれやあれではてるげな」を引いている(二二〇頁、注九)。文脈としては理解できるのだが、「あれで」をどう解釈すべきなのかは不明のままである。

引用された『いまみや草』の句は、『日本国語大辞典』の「飯蛸」の項にも掲げてあり、近世の用例としては貴重なのであろう。表現の類似から見て、『妾形氣』の当該部分の注として有効なのはいう迄もない。さて当の来山の句であるが、東京大学総合図書館酒竹文庫蔵『俳諧いまみや艸』(マイクロフィッシュ版)によれば、本句の直前に次のような句文を備えている(私に句読点・濁点を補う)。

香かを持て堀(ママ)おこさるゝ芽めうど哉

さればこそ人は無能なるがよし。多能は君子の恥る所

とも見たり。鳥けだものにてもいはれぬ芸する故に、くゝりまはされ、籠にこめられて、一生呵嘖にあふぞかし。

なまじ香を持っているがために掘起こされてしまう芽うどから、芸を持つ故に「くゝりまはされ、籠にこめられて」一生苦しむ鳥獣へと連想を広げ、人事と重ね合わせた上での飯蛸だった。飯蛸にとつての「芸」は、飯にたとえられる腹中の卵と美味なる点であろう。実のところ、この句文を読む前は、「あれで」を「生れで」と解し、生まれぬまま親の体内で死を迎える卵に思いを寄せたものかと思えていた。しかし、どうもそうではなさそうだ。第一、「生る」は神の出現にこそふさわしく、飯蛸とはなじまない語ではあるまいか。それに「一生呵嘖にあふぞかし」だから念頭にあるのは親蛸に相違ない。飯田正一氏『小西来山俳句解』（前田書店、平成元年十月）では、「飯蛸は、可愛そうにあれで一生を終わってしまうのださうな、の意。飯蛸の小さな姿をあわれんだところに一種のおかしみがある。」（二五四頁）との解が示され、「あれ」を動詞でなく代名詞ととっている。「あはれや」を「可愛や」とする句形も報告されているので、「あれ」が飯蛸の可憐な小ぶりの姿を指すと考えれば説明はつく。しかし『妾形氣』と並べて見て、警句の肝腎な部分が表示語で表される点に、もう一つ納得しがたい気持ちが残るのも確かであった。

ところが、前田勇氏の『近世上方語辞典』（東京堂出版、昭和三十九年四月）の「てかけ」の項に、「妾と飯蛸は穴で果つる」という諺を挙げてあり、「飯蛸は穴に隠れているところを捕られて一命をすて、妾は生涯を肉交におわる」と解釈を下してあるのを見出した。しかも用例として掲げているのが他ならぬ『妾形氣』の目下の検討箇所で、しかも「妾と飯蛸はあなで果る物にして」（傍点引用者）となっているのを見て、最初とはまた違う驚きを強いられた。

まず『妾形氣』の本文は「あれで」「れ」は「連」のくずしで疑問はない。『近世上方語辞典』の用例検索は原本に基いていないのだろう。それはともかく、「あれ」がもし「あな」ならば、当該箇所解はずつと明瞭になる。ただし妾の方の「あな」を前田氏のように解するべきか否か。飯蛸は蛸壺の中で生涯を終えるはめとなり、妾は困われ者として穴倉のような妾宅で生涯を終えるのとつてもよいのではなからうか。もつとも、表現の面白さと毒では前田氏の解がずつと勝る。

問題は『妾形氣』の「あれ」を「あな」と訂することの妥当性と可能性である。「れ」が「連」のくずしであることは前に述べた。しかし、原稿の「な」が「那」を字母とする仮名で、それを「れ」（「礼」を字母とする）と誤認し、版下執筆時に「連」のくずしの「れ」に置き換えた可能性は十分にある。ただし、事は『いまみや草』とも連動する

わけで、『いまみや草』にも同様の改訂を施すことが許されるかどうか。版面を見ると、「あれ」の「れ」は「礼」のくずしで、「くゝりまはされ」の「れ」とほほ同形、文字からは「な」とは読めない。「礼」と「那」のくずしがいくら似ているとはいえ、二つの資料がいずれも同様の誤りを犯すとも思えない。偶然にしては出来すぎている。考えられることとすれば、秋成が『いまみや草』を読んで直接用いたとの推定であるが、もしそうだとすると、秋成は来山の句をどう理解したのか。版本の「あれ」は動かしようもなく、そこに疑問をさしはさまずに引用したのなら、ここを「あな」と訂するのは無理である。「あな」の誤刻と見たいところだが、もう一つ確信は持てぬままである。それにしても、前田氏はどうして『妾形氣』の用例文を「あなで果る」としたのだろうか。先程は原本不参看の可能性を云々したけれど、ひよっとすると前田氏は、この箇所を誤刻と見なし、「あなで果る」とそしらぬ顔で改訂した上で引用したのかもしれない。とすれば筆者は疑問を前田氏と共有していたことになり、心細さはいささかなりとも減ずる。辞典の用例の扱いとしては問題ではあるけれども。

三 卷二―三「心だておとなしきやら」

卷二―三「若後家の寺参りはてつきり仕立物やの宿替」

の主人公、京の建仁寺町に弟の吟七（実は夫）と仕立物屋を営む若後家のお糸の器量は次のごとく評判の的となっていた。

年は三十でもあるふか脊恰好爪はつれ中肉なれど尋常にて。寝起からも笑ひ顔のすき通る髪のかゝり。あれが後家かと思ふたびに。咽かほかさぬはなかりけり。しかも心だておとなしきやら。朝夕の仏壇に過ゆかれし人の菩提を念比に吊ひて。すきさへあればそろくと。知恩院誓願寺にあゆみを運び。水晶の念珠につたふ涙の神妙さ。思はくよする人もあまた有中に。（六丁オ、十七丁ウ、八十五頁、八十八頁）

美人局の正体が頭われる結末を予想だにさせないしおらしい美人ぶりがおもしろいが、それはともかく、一読再読してどうにも腑に落ちないのが「しかも心だておとなしきやら」の「やら」である。

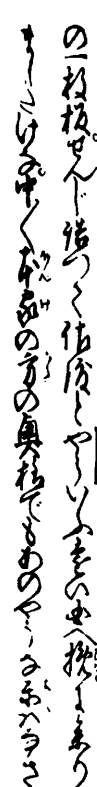
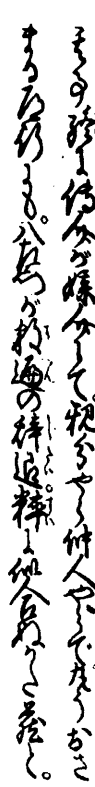
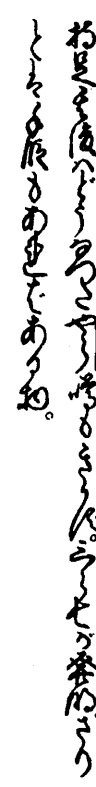
副助詞「やら」は、不確定の事柄を述べたり、二つ以上の事柄を並列的に述べたりする際に使用される。現に『妾形氣』の中から用例を拾っても、その用法に包含される。

- 1 せんじ詰つて佐渡とやらいふ遠い国へ挽に参りましたけな。（卷二、八丁オ、六十九頁）
- 2 其事終に伝介が媒介して。親分やら仲人やらで。丸うおさまる道行にも。（卷二、十三丁オ、七十九頁）
- 3 其後はどうなつたやら噂もきかず。（卷二、十五丁ウ、

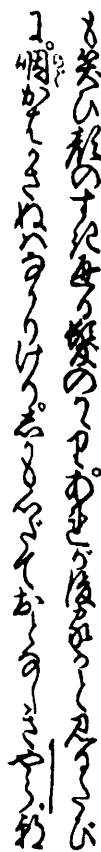
1は「佐渡」という事実が不確定ゆえの表現、2は並列、3は終助詞のような使い方で、「どうなったのか」とでも訳するのが適当な例である。いずれも「やら」の用法としては典型的で、秋成は「やら」を正しく使っていると見てよさそうである。

ところが掲出した「心だておとなしきやら」は、右のどこにも該当しない。「やら」に上接する「おとなしき」が不確定であろうはすがないし、並列すべき他の要素もない。並列の場合は「やら」が繰り返して登場するけれど、ここには一つしかない。終助詞的に切るにしても、やはり不確定の要因がなければ成り立つまい。

ここで「やら」を「やう」の誤りと見てはどうだろうか。まず字形を確認する。先の1〜3の箇所を影印で示せば次の通り（「やら」の部分に傍線を入れた）。

- 1 
- 2 
- 3 

2と3は字形のみでも「やら」と判読できようが、1は文脈の助けがあつて初めて「やら」と読めるのではないか。文字だけ切り出せば「やう」と読んで差しつかえあるまい。もっとも、こうして改めて実例を比較するまでもなく、「ら」と「う」は混同されやすい。となると、この二文字の読み分けは、字形だけで考えるのではなく、文脈に即して検討しなければ完全とはいえないであろう。「心だておとなしきやら」の部分の影印は、



となっていて、字形は「ら」であろう。しかし「やら」では意味が通じない。「おとなしきやう」と読んで「様」の意味を汲み取るべきであろう。秋成はお糸の人柄を「心だておとなしきやう」として大づかみに述べ、それから亡夫の墓参で流す涙へと具体的な描写で肉付けするという方法を採用した。文章としては流麗な筆運びといつてよからう。その要の部分「やら」と誤認したままでは、せつかくの秋成の表現力を見損うことにならないか。

以上、瑣末な事例でしかも三つに留まること、不十分との謗りは甘んじて受けたい。許された紙幅では三例に限る他なかつたし、この調子で不審箇所をひとつひとつ論うの

では際限がなさすぎる。ただ、改めて申し述べたいのは、活字による本文提供、特に中央公論社版『上田秋成全集』のような完璧な校訂を目ざして作られた全集が、強大な影響力を有するがゆえに、あえて禁欲的に最小限の校訂にとどめて原本通りとするという方針のもとに編纂されるのは至極もつとものだとしても、校訂担当の編集者の方々の作業の結果として本文に疑問が残るならば、せめて（ママ）の付記を積極的に行うなどの処置を是非とつていただきたいということである。それは本文提供の後に注釈や論文でなされればよいという意見もあろう。しかし、研究対象となっている近世文学の作品のすべてに注が付されることは金輪際あるはずもなく、主要作品ですら満足な注釈を施されなままとなつている場合もある。このような状況では、それぞれの専門家が本文提供の段階で自分の読みを開示しておくことが次善の策として要請されるのではなからうか。そうでないと徒らに後学や門学漢を迷わせることになる。まさか専門家だけに通用する秘伝というわけでもあるまい。横山先生の御退任記念に寄せる稿として、先生の御専門に近いところで何か材料はとあわてて捜し回った挙句の小篇、御嘉納いただければ幸いである。

注

(1) 以下、『妾形氣』の引用は、木越治氏編『世間妾形氣』

(和泉書院、一九八九年四月)の影印に拠る。句点や振り仮名、濁点は原本のまま。ただし「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」と直した。丁数と影印本のページ数を付記する。

(2) 小学館日本古典文学全集『源氏物語 六』一八八頁。